

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 24 日現在

機関番号：64401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2012～2013

課題番号：24820074

研究課題名(和文) 生理用品の流入による女性の身体観の変容：パプアニューギニアの事例から

研究課題名(英文) Changing the Views about Woman's Bodies through Using Sanitary Protection in Papua New Guinea.

研究代表者

新本 万里子 (Shinmoto, Mariko)

国立民族学博物館・民族社会研究部・外来研究員

研究者番号：60634219

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円、(間接経費) 540,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の対象であるメラネシアは、月経や出産という女性の身体の生理的現象を忌避する社会として広く知られている。本研究は、パプアニューギニアにおける生理用品(ナプキンのような西洋起源の月経処置の道具)の受容に焦点をあてて、女性の身体の歴史的経験を明らかにすることを目的とした。

月経処置の道具の変遷について、基礎的な資料を収集した。それらの使用方法と月経期間の過ごし方から、月経小屋が存在した当時とナプキンが普及した現在の月経にまつわる慣行を比較した。ナプキンの使用によって女性は行動範囲を広げ、月経という身体の出来事は女性個人のものとなった。

研究成果の概要(英文)：Melanesia is well known as a society which regards women's physiological phenomena like menstruation and childbirth with great aversion. This study describes the historical experience of a woman's body through the influx of sanitary items like sanitary napkins.

I have collected fundamental information about the change and use of sanitary items. I have compared the practices of women who use sanitary items with those of women who used to go to a menstrual hut when they had their period. Sanitary napkins have enabled women to expand the radius of action. Menstruation has become a personal hidden matter.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：生理用品 月経 身体観 パプアニューギニア アベラム ジェンダー

1. 研究開始当初の背景

月経と出産などの生理的現象を忌避する社会は広く世界各地に認められ、死の不浄などととも、文化人類学においては「ケガレ」として理論化されてきた。

本研究の対象であるメラネシアは、女性の身体の生理的現象を忌避する社会として広く知られており、月経を含む身体的な物質（血液・精液・唾など）の使用と処置が、身体観を考察する上で重要である。ことにパプアニューギニアの女性たちは、月経及び出産の期間を特定の小屋（以下、月経小屋と記述する）で過ごすという慣習を有していた。しかし、近年、村落から月経小屋が徐々に消えるという現象が起こっている。その背景には、生理用品（西洋起源のナプキン、タンポンなどの月経処置の道具）の普及があると考えられる。

生理用品の受容による社会変化という課題は、日本本島、沖縄、ヤップ島などの事例で研究されている。これまでに、女性の行動範囲が広がり、当該社会の「ケガレ」観が変容したことが報告されてきた。パプアニューギニアにおいては、月経の禁忌について論じた文献は多いものの、月経処置の道具や女性たちの月経期間の過ごし方にまで言及したものは数少ない。生理用品の受容を切り口にするには、当該社会のジェンダーを女性たちの経験に即して分析できる可能性がある。

2. 研究の目的

本研究は、モノの受容・流通がもたらす身体観の変容を、ジェンダーの視点から文化人類学的に考察する。具体的には、メラネシアにおける生理用品の受容を事例に、月経にまつわる慣行や、その使用による身体観の変容を明らかにすることを目的とした。

生理用品というモノの受容に焦点をあてて女性の身体の歴史的経験を描くことは、対象社会の身体観を動的に捉えるばかりではなく、植民地化以降のパプアニューギニアの女性が、モダニティをいかに流用したのかを明らかにできる。また、月経小屋を中心とする月経にまつわる慣行は、その存在こそが知られていたが、女性研究者の入りにくい調査地であったこともあり、基礎的なデータの水準で存在していない。本研究によってそうしたデータの欠落を埋め、隠された女性による文化的側面を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 生理用品の普及に関する歴史人類学的研究を第一の方法とする。今日の生理用品の普及は流通ルートが確保されたことによると考えられるが、生理用品を使用する慣行を生み出した近代医療や学校教育などの制度面での整備による身体観の変容を研究する必要がある。生理用品のモノとしての導入・普及の過程を、パプアニューギニア国立古文

書館とパプアニューギニア大学、国立調査研究所に収蔵されている資料の精読から明らかにする。

(2) 伝統的な月経処置に関する民族誌的研究を第二の方法とする。調査の対象としたのは、東セピック州マプリック地区ニヤミクム村（East Sepik Province Maprik District Nyamikum）である。この村には、土間式の月経小屋があったという。一部地区で高床式の月経小屋を2006年に確認したが、土間式の月経小屋を使用した経験をもつ女性は高齢になっており、月経小屋と伝統的な月経処置の道具に関する記録・保存は急務と考えられた。月経処置の道具の収集・計測を行うとともに、それらの処置や使用感について聞き取りを行い、月経に対する意識を明らかにする。

(3) 現在の月経処置に関する民族誌的研究を第三の方法とした。若い世代の女性は、生理用品を使用して学校へ通っている。生理用品の普及は、女性を、月経期間の身体的拘束から解放したと推定できる。生理用品の購入方法、使用感、経血のついた生理用品の処置について聞き取りを行い、生理用品を使用する世代の月経についての意識を明らかにする。

4. 研究成果

(1) 生理用品の普及に関して、資料の精読と調査地での聞き取りにより以下のような見解を得た。

近代医療や学校教育などの制度の導入は、オーストラリアによる植民地時代に始まった。1960年代には、マプリック町の病院に勤務するオーストラリア人医師や看護師が、妊婦の検診や乳児の検診のためにマプリック町周辺の村々を巡回した。調査村でも、当時こうした検診が行われていた。看護師の記録から、月経小屋での出産を彼らが危険視していたことが分かる。しかし、月経小屋を中心とする慣習は、簡単には変わらなかった。

生理用品が調査村でも使用されるようになるのは、都市部で生活し、生理用品を使用した経験のある女性の帰村と、生理用品の流通ルートが確保されたことによる。調査村で生理用品が普及すると、女性たちは、生理用品を使用することによって月経期間中でも休まずに学校へ通学するようになる。若い女性が月経小屋に行かなくなり、しだいに月経小屋は数を減らしていったと考えられる。近年では、学校の保健教育の一環として、女性の生理が扱われている。

以上のように、生理用品の流通ルートの確保に加えて、近代医療や学校教育などの制度の導入が、生理用品を使用する慣行を生み出したと考えられる。

(2) 調査村において、10代から80代までの50人の女性に、月経処置の道具と月経処置に

関する聞き取りを行った。その結果、月経処置の道具は、次のように変遷していることが分かった。

伝統的な月経小屋は土間式であった。その中に、仏炎苞（ヤシ科植物の羽根状の葉で、人間一人が座ることのできるほどの大きさ）を敷き、女性たちは下半身に何も身に纏わずに座っていた。植民地化以降、布が流入し、女性たちは布を月経処置に用いるようになる。その使用法は、仏炎苞の上に布を敷き、その上に座るといったものであった。

土間式の月経小屋を使用していた 1970 年代末に、都市部で生活した経験のある若い女性が帰村した。現在 40 代後半になるこの女性は、直接仏炎苞に座ることができず、ナプキンを使用したまま、仏炎苞に座っていたという。こうした女性たちが、やがて月経小屋を使用しなくなり、1980 年代から徐々に月経小屋の数が減少した。

こうした現象と並行して、高床式の家屋や高床式の月経小屋が作られるようになった。都市部での経験をもたない村の女性たちは、高床式の月経小屋を利用するようになった。さらに、高床式の月経小屋さえ作られなくなると、村の女たちは、高床式家屋の隅や床下に座るようになった。

若い世代になるにつれ、ナプキンの使用が一般化した。とくに、10 代から 20 代の就学期の女性にナプキンの使用者が多い。就学を終え、村で生活する若い女性には、布をパンツの中に敷いて使用する者もいる。タンポンについては、50 人中 1 名のみしか使用経験がなく、ナプキンとの普及の差が確認された。

以上の月経処置の道具の変遷は、50 人分のデータとして提示することができる。当該社会の生理用品の受容を分析する上で基礎的なデータであり、他地域との比較研究にも耐えうるデータの収集ができたと考えられる。

(3) 伝統的な月経処置を経験した高齢の女性たちから、当時の月経期間の過ごし方について聞き取りを行った。集落に少なくとも一棟は月経小屋があり、一人、または数人で月経期間を過ごしていたという。土間式月経小屋の中で女性たちが座っていた仏炎苞は、経血を吸収しない。女性たちは、湿って冷たく、乾くと肌に仏炎苞が着くという身体感覚を経験していた。また、臭いもしたという。集落には月経期間の女性だけが使用する泉があり、月経期間の女性は、そこに体を洗いにいったという。

月経期間、女性は月経小屋を利用するため、普段料理をしたり、就寝したりしている家に不在となる。そのため、集落の誰もが、女性が月経期間であることを知ることができたという。いわば、月経小屋は女性の性を可視化する装置として機能していた。

村で最初に月経小屋を利用しなくなった女性が誰かということは、男性にも認識されている。こうした認識が存在するのは、月経

小屋が女性の性を可視化する装置として働いていたからこそである。

この月経小屋の機能は、当該社会の当時の性のあり方を考察するうえで、重要な事実となると考えられる。

(4) ナプキンの使用によって、女性たちは月経期間でも人前を歩くことができるようになった。当該社会において、男性と、男性の生産物に危険なものとみなされていた月経期間の女性が、隔離されることがなくなったのである。月経小屋を男性が作らなくなったのは、男たちの諦めを示すと考えられる。

女性たちはナプキンの使用によって、行動範囲を広げた。月経期間の女性は不可視となり、月経という身体の出来事は女性個人のものとなった。

可視化される性から不可視な性へという変化が認められる。この見解は、生理現象に対する世界各地の事例との通文化的な比較研究に昇華する上で、重要な見解となると考えられる。

(5) ナプキンの普及に比べて、タンポンは、その存在さえ村の多くの女性に知られていない。この差がどこから生じているのかを、今後、精査する必要がある。ナプキンとタンポンをめぐる言説と女性たちの実践が次の研究課題となると考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

新本 万里子、月経小屋の消滅と高床式家屋の出現 パプアニューギニア・アベラム社会の性と家族、信田敏弘・小池誠編、生をつなぐ家、風響社、2013、221-241。

〔学会発表〕(計 4 件)

新本 万里子、病院出産への移行による生殖観の変容 パプアニューギニア・アベラム社会における出産慣習の変化から、日本文化人類学会第 48 回研究大会、2014 年 5 月 17 日～5 月 18 日、幕張メッセ国際会議場

新本 万里子、生理用品の受容によるケレレ観の変容 パプアニューギニア・アベラム社会の事例から、日本文化人類学会第 47 回研究大会、2013 年 6 月 8 日～6 月 9 日、慶応義塾大学

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

新本 万里子 (SHINMOTO, Mariko)
国立民族学博物館・民族社会研究部・外来
研究員
研究者番号：6 0 6 3 4 2 1 9

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：